機関紙じんけん　第 171 号　令和 8 年 (2026 年) 10 月 16 日 発行

じんけん

発　行
豊中市人権教育推進委員協議会
機関紙編集部会
（豊中市教育委員会事務局社会教育課内）
電話 06-6858-2580



令和 8 年度（2026 年度）人権作品募集入選作品より

巻頭言

あのときのお昼どきのこんなはなしが忘れられない

会長　青木 康二

「私、通勤の時、集団登校と一緒になるんです。今日、こんなことあったんです。1年生の子って、ランドセルのところに防犯ブザーをつけてるじゃないですか。その1年生かなぁ可愛い男の子がね、集団登校のリーダーというかお姉ちゃんがいてるでしょう、そのお姉ちゃんのランドセルにはブザーがなかったものだから、『防犯ブザー、どうしたん？食べたん？』と聞くんです。そしたら6年生らしき女の子は、『そうや、食べてん！』と応えるんです。とたん、1年生の子『そりゃ大変やなあ。お腹、ブザーなるやん！』女の子は『そうやあ、大変やねんで！』って返答してました。そして道の角のところに来たら、『こっち曲がるでぇ』と気を遣ってくれているし、駅のところまで来ると、腕章したおじさんが『おはよう』って声掛けてくれていて、どういったことではないんだけど、ほほえましいと言うか、気持ちが優しくなると言うか、そんな風景があったんですよ」と、もう随分と昔のことですが、職場の仲間が話してくれました。



高学年と低学年、おおきく歳が離れていて、だけど、そこにあるのはとても豊かな人と人との関係があるというのでしょうか、何気ないやりとりで、お互いの存在を丸ごと受け止めているというのでしょうか、認め合っている関係性、つながっているという実感が伝わってくるような気がしました。私たち大人のあり方や関係づくりにも通じるものだなぁと思いました。

私たち大人や子どもは、自分と違うというか、そんな材料があったら、ちくちくとそこをつついて斜交(はすか)いにその人のことを見たり言ったり、険のある眼差しでにらんだり見下げたりして、相手の心を傷つけてしまうことはよくあるように思います。

「私、朝、こんな風景、見たんです」とお昼を一緒に食べながら語ってくれた、若い同僚の豊かな目線に出会った嬉しさとあわせて、こんな風景が、家庭やまちのあちこち、学校で見かけることができたらいいなぁと思いました。そのような風景がていねいに紡ぎ合っていくことができれば、人の痛みにこころから向き合うことができるのだなぁと思った、あのときのお昼どきでした。

総会報告

日差しの強さが初夏を思わせる5月14日(木)、豊中市立文化芸術センター小ホールにて、105名の参加者のもと、令和8年(2026年)豊中市人権教育推進委員協議会の総会が開催されました。来賓の方々より、豊中市制90年の歴史の中には人権文化がしっかり根付いていると励ましのお言葉をいただきました。

総会成立が報告された後、昨年度の事業報告・決算・監査報告が承認され、続いて今年度の活動方針・事業計画・予算が提案され承認されました。

多様性の時代、日常の身近な体験から人権を意識することが学びとなります。戦後80年を経てもなお平和と人権を波及させる茨(いばら)の道は続きます。人権協も平和への祈りを吹き込んだ紙風船、何度落ちてきても空高く飛ばしたいと思います。

総会後の研修を終えて

総会後、人権啓発ビデオ『見上げれば』が上映されました。大学生になってからひきこもりとなった主人公は、音信不通だった中学の同級生から送られてきたオンラインゲームでつながり心を開いていくが、家族の言動や誤解から再び心を閉ざしてしまう。この同級生もまた高校時代にひきこもりの過去があり、この主人公につながりを求めていた。

このドラマは、信頼できる他者とのつながりや、寄り添ってくれる人のいる「居場所」、早い段階での適切な支援がひきこもりからの回復のきっかけにつながるということを教えてくれました。



人権教育をすすめる市民の集い

(世界人権デー啓発事業)

開催要項

主　　旨　豊中市人権教育推進委員協議会はすべての市民の人権意識を高め、より人権尊重の輪を広げるため「市民の集い」を開催します。

開 催 日　令和８年(2026年)12月10日(木)

時　　間　13:00 ～ 15:30(受付12:30 ～)

会　　場　豊中市立文化芸術センター中ホール(アクア文化ホール)



プログラム

意見発表　十三中校区

記念講演　テーマ　紛争地、被災地に生きる人々の声
～取材から見えてきたこと～

講　師　安田　菜津紀 さん　認定NPO 法人Dialogue for People 副代表／フォトジャーナリスト

16 歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。

申込方法　ホームページから電子申込(11 月1 日より)にてお申し込みください。
申込締切12月２日(火)手話通訳・筆記通訳・保育あり
(保育は２歳以上。12月２日(火)までに要予約)

市民の集い　ホームページ

人権協ホームページ

♪ あなたも推進委員になりませんか ♪

本協議会では私たちの活動を幅広く知っていただくために、今年度から豊中市立の小・中・義務教育学校に通う全ご家庭に本機関紙を配布することにしました。年３回の研修講座や校区ごとの現地研修を行っています。ご興味のある方はぜひ推進委員に加入してみませんか。

(問合せ先)

〒561-8501　豊中市中桜塚 3-1-1

豊中市人権教育推進委員協議会事務局（社会教育課内）　電話　06-6858-2580　FAX　06-6846-9649

令和８年度（2026年度）活動方針

戦後80年の節目に、豊中市人権教育推進委員協議会も微力ながら平和の祈りをつないできました。ウクライナ侵攻やガザ市民大量殺害に対して、人権作品展を通じて広く平和の大切さを訴えてきました。しかし、新たにアメリカ・イスラエルがイランを攻撃し、その報復攻撃により戦禍は中東全域に拡大しています。80年の祈りだけでは足りないのなら、私たちは更に祈りをつなげましょう。

市民の集い、講談師の神田香織さんは、9歳の少年が見た戦争と原爆の真実、80年前の原爆に怒りを込めて「はだしのゲン」を熱演されました。会場からの感想に「泣き過ぎてしんどくなりましたが、『生きていかなければ』という生命力の強さ、そして未来へのメッセージを感じた」など、多くの反響は戦後80年に相応しいものでした。

十二中校区の発表も意義深いものでした。コロナ禍で地域コミュニティが希薄になり、豊南(H)小曽根(O)高川(T)で新たに「HOTな地域づくり」が始まった。地域と協働し「自治の力を育む」活動は、各校区共通の課題です。

2025年度はとりわけ「豊中四中夜間50周年」から多くを学びました。60歳生徒の貧困と差別の半生、夜間中の正門をくぐるまでの長い道のりと葛藤、やっと教室へ。仲間が拍手で迎えてくれた。「四中夜間はずっとあなたを待っていたのです」先生がにっこり話してくれた。60歳生徒はようやく奪われた文字を取り戻したのです。

人権協として四中夜間50周年に協力したい。多くの人たちに夜間教室を知ってほしいと「夜間中学校ロビー展」を開催した。準備をしながら作品を手にとると、私たちは四中夜間をサポートしながら、私たち人権協がサポートされていることに気づかされました。「よめるよ　かけるよ　ともだちできるよ　じんせいかわるよ　いっしょにまなぼう」、圧巻のギャラリーが語りかけてきます。それは私たちの活動そのものです。

ロビー展には多くの市民が足を止めました。戦後80年を経て、なお平和と人権を波及させる茨(いばら)の道は続きます。作品が私たちにエールを送っています。「紙風船　落ちてきたら　今度はもっと高く　何度でもうちあげよう」。人権協もひるむことなく祈りを込めて「平和」の紙風船をもっともっと空高く飛ばしたいと思います。

つなごう つなげよう 人権の輪

「願うこと」

少し重い話になります。
友人が亡くなりました。
自ら選んだものでした。
亡くなる数日前に会いました。
「またね」と言って別れました。
鬱を患っていることは知っていました。
だいぶ良くなってきていることも知っていました。
そして、鬱は回復に向かっている時がいちばん命を断ちやすいということも知っていました。
現状に対して将来を悲観してしまうからだと。
良くなったらこんな事したい、なんて将来の話もしていました。…だから、気づきませんでした。

最後に助けを求めただろうとおもうのだけれど、それを受け取ることも、話をして一緒に考えることもできませんでした。
後悔ばかりの中で、次は…と願わざるを得ません。



活動の中の繋がろう繋げよう人権の輪

私の長男がランドセルを買う時、赤い色のランドセルが欲しいと言いました。私自身が小学生の頃は、男の子は黒色、女の子は赤色と決まっていましたが、今はランドセルもカラフルなので、好きな色を選択することができます。幼稚園児だった長男はレンジャーものが好きで、主人公のヒーローは赤色。そして赤色が好きだった長男が赤色を選択しても不思議ではありません。その時、男の子だから赤色はいじめられたりしないかな？と思ってしまいました。

その後、人権に関わった最初の講座で、男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくというのは、人権問題の一つになると学び、ランドセルのことを思い出しました。何色を選択しても個性なのですね。子どもも大人もすべての人に人権があり、些細なことでも大切にしなくてはいけないとたくさんの人に繋いでいけたらいいなと思っています。素晴らしい講演がたくさんあるので、ぜひご参加ください。

十五中校区常任委員　河合　満美

学校では今

千里わかば学園　豊中市立第八中学校　校長　吉識　泰子

令和8年4月、北丘小学校、東丘小学校、第八中学校は豊中市で初めての施設分離型小中一貫校「千里わかば学園」になりました。

千里わかば学園では、三校が一体となり、子どもたちが互いの違いを認め合いながら成長できる環境づくりを進めています。

その象徴的な出来事として、学園キャラクターの選定にまつわるエピソードがあります。

キャラクターづくりは、三校の児童会・生徒会が合同で話し合いを重ねるところから始まりました。年齢も学校も異なる子どもたちが、「学園を代表する存在とは何か」「みんなが親しみを持てる名前はどんなものか」と、真剣に意見を交わしました。時には考えがぶつかる場面もありましたが、互いの意見を否定するのではなく、「どうしてそう思うのか」を丁寧に聞き合う姿が印象的でした。

議論を重ねる中で、「学園の子どもたちが未来へ羽ばたく姿を表したい」という思いが共有され、最終的にキャラクター名は“わかバード”に決まりました。小学生の柔らかな発想と、中学生の論理的な視点が自然に混ざり合い、年齢を超えて最善の案を選ぼうとする態度が育っていることを強く感じました。



このプロセスは、単なるキャラクターづくりではありません。子どもたちが互いの価値観を尊重し、違いを受け入れながら一つの答えを導き出すという、人権教育の核心そのものではないかと感じました。自分の意見を大切にしながらも、他者の考えに耳を傾ける姿勢は、学園がめざす「もちあじを大切に、他者とつながり、チャレンジする」子どもの姿を体現しています。

千里わかば学園は、これからも子どもたちが互いを尊重し合いながら未来へ羽ばたける学びの場を、地域とともに育んでいきたいと考えています。

基礎講座を受けて…

①豊中市人権協のあゆみと今後の課題　元豊中市教育委員会人権啓発指導員　新堀　祥一

②芸能史の愉しみ　民衆と芸能　事務局長　西田　益久



①市民個人の資格で参加するという特色をもつ豊中市人権教育推進委員協議会。根強く残る差別意識の払拭には、市民一人ひとりへの人権教育の徹底が不可欠とし、市民ぐるみで人権を学ぶ団体としてあゆんできたと学んだ。数回目の受講だが、時間とともに記憶は薄れてしまうことも多い。生涯学習として学び続けることの大切さを改めて実感した。

会計　林　久美子



②私が幼いころ、喫茶店を営んでいた実家の手伝いで家の近所の「大阪能楽会館」に出前に行くことがありました。能楽の荘厳さは幼い私には少し怖いものでした。かつて「河原者」と呼ばれた人から始まった伝統芸能が、今では無形文化遺産となり「人間国宝」に認定されている方もおられるそうです。これは絶やさぬよう引き継いでこられた方々の功績だと私は感じました。

二中校区常任委員 矢森 和枝

第１回推進委員研修講座

・**テーマ**　「一人ひとりのちがいを豊かさに～豊中で進める多文化共生のまちづくりから～」

・**講　師**　公益財団法人とよなか国際交流協会事務局長　山野上　隆史さん



全国で外国人労働者とその家族が増加する中、ここ豊中市でも同様の現状にあります。

多言語対応などの支援が拡充されていく一方、偏見やヘイト、日本語を話す子どもと母語で意思疎通が取れない親子間の問題など、深刻な課題が存在します。さらに根拠のないデマも横行しており、「ソウカナ（即断・鵜呑みをしない・偏らない・中だけ見ない）」の意識を持ち、差別や偏見を広めない工夫が求められています。

外国人にルール遵守や規制強化を求める前に、自分たちが無意識に傷つけていないか、偏見がないかを常に問い直し、学び続ける姿勢が必要です。互いの「違い」を認め合い、それを地域の強みに変えて、構造的な公平さのもとで共生できるまちをめざしたいと感じました。

三中校区常任委員　山田　紗保

第２回推進委員研修講座開催案内

どんな人でも誰かの力になれる
～やさしさが循環する世界～

日　時：2026 年 11 月 5 日（木）10 時～

場　所：教育センター 6 階教科教育研修室

第３回推進委員研修講座開催案内

いじめ対応の『今』
～多様化する課題と大人の視点～

日　時：2027 年 2 月 13 日（土）10 時～

場　所：地域共生センター 3 会大会議室

編集後記

各地で自然災害が起こっています。被災された皆さまに心よりお見舞い申しあげます。一日も早い復旧・復興をお祈り申しあげます。ご投稿いただきました皆さまに厚くお礼申しあげます。

書記　福田　みどり